

梅雨入りが宣言されました。降れば雨を楽しみ、降らなければ、太陽を楽しもうと思っています。

現在会員登録数 4,420 人さま。次号は 7 月 23 日発行の予定です／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■ ----- ■
【1】お知らせ

● 当財団の新理事長に 富安陽子さんが就任

6 月 17 日に開催した役員会において、当財団第 8 代理事長に、児童文学作家の富安陽子さんが選定され、就任しました。

● 第 20 回「国際グリム賞」の受賞者が、エマー・オサリバン博士（ドイツ・ロイファナ大学リュネブルク教授）に決定しました。

贈呈式および記念講演会は、令和 8 年 2 月開催予定です。 詳細は↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/01_grimm/index.html#grimm_20

● 村上しいこさんのワークショップ＆講演会 参加申込受付中

◇ワークショップ「「日曜日」シリーズ 村上しいこさんとオリジナル・ストーリーをつくってみよう！」 田中六大さんオンラインゲスト出演

7 月 20 日（日）10：00～12：00 小学生対象 定員 40 人 参加費 500 円

※詳細、お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#070720ws

◇講演会「子どもが夢中になる秘密 「日曜日」シリーズ完結を記念して」

7 月 20 日（日）13：00～16：00 大人対象 定員 60 人 参加費 1000 円

※《残席わずか》 詳細、お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#070720lecture

● オンライン講座「2024 年に出版された子どもの本から」申込受付中

2024 年に出版された新しい子どもの本約 250 冊をテーマやジャンル、年齢別に紹介し、現在の子どもの本の傾向について考えます。

今年は、Z o o m でのリアルタイム開催の後、録画配信します。

◇リアルタイム参加（Z o o m）7 月 25 日（金）10：30～12：00、13：00～15：00

質疑応答の時間あり。録画配信も視聴可。 定員 60 人、参加費 1000 円

※お申し込みは Peatix から <https://2024kodomonohon-1.peatix.com/>

◇録画配信 8 月 8 日（金）～12 月 15 日（月） 視聴料 1000 円

※お申し込みは Peatix から <https://2024kodomonohon-2.peatix.com/>

●「大阪国際児童文学振興財団 研究紀要」第 39 号の原稿募集

応募締切：10 月 31 日（金）

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/04_journal/boshu.html

◇最新号（第 38 号）から、J-STAGE でのオンライン公開を開始しました。

冊子の販売もしています。（1980 円） ※詳細は ↓

http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/04_journal/index.html#38

● « ご寄付をお願いします »

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

■ ----- ■
【 2 】 コラム
■ ----- ■

《 1 》この本読んだ？ Yasuko's & Aya's Talk

『デュポン書店の奇妙な事件』 ファブリーツィオ・アルティエーリ/作
クラウディア・ペトラッツィ/絵 よしとみあや/訳 影書房 2025 年 5 月
対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストはイタリア語の翻訳家で、本作の翻訳者であるよしとみあや（A）さんです。

* 作品の結末まで書いています。

あらすじ：1900 年初頭のパリ。特別な 5 フラン硬貨を使って人の財布を盗み、警察に追われている孤児の少年マックスは、ひよんなことで知り合った香水屋の娘デジレのアドバイスで、香水屋の隣にあり、長い間閉店している書店に逃げこむ。無人だと思っていた書店には店主のデュポンが住んでいて、エチエンヌの帰りを待っていると言う。デュポンのために書店を再開させようとマックスとデジレは奮闘するが、向かいにオープンした大型書店のオーナー・バルタザールから横やりが入る。小さな書店をめぐる、友情と連帯の物語。

Y：エチエンヌとは誰なのか？孤児の少年マックスは、財布を盗んだことで警官に捕らえられてしまうのかなど、謎解きの要素が次々とあって楽しく読めました。

この本との出会いを教えてください。

A：イタリアの本屋さんで見つけて読みました。私にとっては、マックスを助けるために活躍するデジレや、デュポンさんが息子を亡くして悲しみにくれているのを知って閉店中の書店に食事を届け続けるマダム・マーシャン、夫を亡くしたデジレのお母さんが香水店を経営している様子など、女子・女性の活躍が魅力でした。

Y：なるほど。私は、孤児のマックスが息子を亡くしたデュポンさんと生活することで二人に心の交流が生まれる様子が心に残りました。

A：マックスとデジレの友情も楽しめます。そして、息子を亡くしてから 7 年間、閉店し、引きこもっていながらも、毎日、書店の本のほこりを払い続けてきたデュポンさんの本や書店への愛に共感しました。

Y：この作品には、大型書店を経営するバルタザールさんが、デュポンさんの対比として登場します。

A：お金儲けしか考えず、客にじっくり本を選ばせないように大音量で音楽をかけ、「売りたい本を敵に売る」と従業員に命令するバルタザールは、現代の商業主義を批判しているとも読めます。

Y：作者はどんな人ですか。

A：これまでに第二次世界大戦後、女性に初めて選挙権が与えられた時のことを描いた作品や、ナチスの優生思想の下、ダウン症の妹のいる主人公が何とか妹を助けようとする様子を犬と子どもの主人公の視点で描いた作品などがあります。

Y：キーワードに女性があり、社会派という感じがします。この作品は今お話をくださった作品に比べるとエンターテインメント性が強いように感じますが、底流に現代社会への批判があることが納得できました。

挿絵もユーモラスで作品の人物像を巧みに表現しています。

A：イタリアでは続編が出版されています。パリの下水道やパリ万博の様子などがでてきます。機会があれば、訳してみたいです。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第 118 回「[手紙 (四)]」

「原型」の発信

「わたし^(ママ)はあるひとから云いつけられて、この手紙を印刷してあなたがたにおわたしします。どなたか、ポーセがほんとうにどうなったか、知っているかたはありませんか。」——「[手紙 (四)]」と呼ばれる物語の書き出しです。実際に洋紙 1 枚に黒インクで印刷され、「[手紙 (一)]」から(三)と同様、匿名による郵送や手渡しなどで配布されました。

物語のなかで、チュンセの小さな妹のポーセが、11 月ころ、にわかに病気になります。

〈「雨雪にとって来てやろか。」「うん。」ポーセがやっと答えました。チュンセはまるで鉄砲丸のようにおもてに飛び出しました。おもてはうすくらくてみぞれがびちょびちょ降っていました。チュンセは松の木の枝から雨雪を両手にいっぱいにとって来ました。〉

ここから連想するのは、もちろん、賢治が妹トシの死に立ち会った詩「永訣の朝」です。芹沢俊介は、この場面に「『永訣の朝』の原型性（前身ではない）を看取する」といいました（『無声慟哭』ノート 1975 年、カッコ内原文）。

天沢退二郎は、1922（大正 11）年 11 月の妹トシの死が宮沢賢治の「文学世界へ外側から、実生活の側から、殆ど不意打ち的に侵入してきた」事件であるとしました（『宮沢賢治の彼方へ』新增補改訂版、1987 年）。『春と修羅』（1924 年）に収録された「永訣の朝」の初稿が書かれたのは、死の翌年と考えられています。が、「手紙 四」の配布も、同じころだと思われます。

そして、物語の兄妹の名前は、もっとも初期の童話「双子の星」の天の川の西の岸の二つの星、チュンセ童子とポーセ童子と同じです。「双子の星」の話は、のちに、「銀河鉄道の夜」の「九、ジョバンニの切符」で、ジョバンニたちと乗り合わせた姉弟の会話に埋め込まれることになります。

ポーセは、チュンセがとってきた雨雪を三さじ食べて、息をつかなくなりました。春になって、チュンセは、うたたねの夢のなかでポーセに会い、ポーセをさがすようになります。けれども、「私」に手紙を云いつけたひとは、「チュンセはポーセをたずねることはむだだ。」「チュンセが（中略）大きな勇気を出してすべてのいきもののほんとうの幸福をさがさなければいけない。」という

のです。

「〔手紙（四）〕」は、「永訣の朝」やその後の挽歌群、「銀河鉄道の夜」にもつながる「原型」をいち早く、ほんとうの手紙として発信した貴重なものといえるでしょう。（馬車別当）

（本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション 2 注文の多い料理店』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 72

サイモンがやってくるのを、かかしたちはじっと見ている。いちばんまえに立っているかかしは、とても大きかった。古いブルーのコートを着てまん中をひもでしばっている。大きな気取った顔には、ほつれた麻のロープで作ったひげがついていて、そのひげは風が吹くと、女のかかしの腕が上下するのに合わせて揺れた。

（『かかし』ロバート・ウェストール/作 金原瑞人/訳 徳間書店 2003年1月 p.188-189 *初版は1987年5月福武書店 原書はイギリスで1981年に出版）

6月14日（土）に元徳間書店編集長の上村令さんの講演会に参加する機会がありました。上村さんの初めての仕事がウェストールの『かかし』の翻訳出版だとうかがって、とても懐かしくなり、再読しました。

今、読んでもまったく古びることなく、10代の少年の家族や性に対するひりひりした心理を鋭く描いた作品としても、「かかし」が襲ってくるという恐怖を描いたホラー作品としても読み応えのある作品でした。

寄宿舍のある学校に通う13歳のサイモンは、母が風刺画を描くジョーと再婚したことで、心の中に嵐が吹き荒れます。夏休みに母と妹とジョーが住む家に帰ったサイモンは、家からカブ畑を越えたところにある無人の水車小屋を見つけます。そこは、かつて三角関係にかかわる殺人事件があったところでした。ある日、サイモンは、カブ畑で3体のかかしを目にします。そのかかしたちは、水車小屋にあったコートを着ていました。サイモンは邪悪なかかしたちが襲ってくる恐怖を感じます。

引用の部分は、サイモンが初めてかかしを見つけた場面です。かかしは、殺人事件の当事者たちであると同時に、軍人で死んでしまったサイモンの父と母とジョーの関係も思わせます。そして、サイモン自身の中にある暴力性や苦しみとも呼応しています。「いちばんまえに立っているかかし」の描写は、殺人事件の当事者で、学校でいじめられ、家でも虐待され、父親が死んで急に金持ちになった水車小屋の持ち主の男を表現しています。そして、「大きな気取った顔」や「ひげ」からサイモンの「男らしさ」に対する抵抗が読み取れ、ひげと女性のかかしの腕が同時に揺れるさまは、セックスに対する嫌悪が感じられます。

このように、ひとつの描写が幾重にも読むことができ、サイモンの母やジョーへの反感ととまどいと母に愛されたいという複雑な気持ちが表現されているところがさすがウェストールだと思いました。（Y）

《4》 行って来ました！

ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店で6月27日まで開催されている「世界のむかしばなし絵本原画展 『ノロウェイの黒牛』『おはなしはどこからきたの？』」に行ってきました。BL出版「世界のむかしばなし絵本シリーズ」から、『ノロウェイの黒牛 イギリス・スコットランドのむかしばなし』（なかがわちひろ/文 さとうゆうすけ/絵 2019年3月）と『おはなしはどこからきたの？ 南アフリカのむかしばなし』（さくまゆみこ/文 保立葉菜/絵 2024年11月）の原画 各6枚、作品のあらすじや絵についての解説パネル、世界のむかしばなし絵本マップなどが展示されていました。

『おはなしはどこからきたの？』は、第72回産経児童出版文化賞美術賞受賞作品で、当財団の「YouTube 版の海大冒険」でとりあげたばかりでした（<https://www.youtube.com/watch?v=2ln0ejGthX8>）。ズールーの人たちの昔話で、マンザンダバという女性が、たき火をかこんで子どもたちに聞かせる「おはなし」をさがしにでかけ、いろんな動物に次々たずねてまわる物語です。絵は保立葉菜さんによる木版画で、たくさんの色を何回も重ねて摺られていると解説パネルに書かれていました。青空や夕焼け空のグラデーション、マンザンダバがウミガメの背中にのって海の底に向かう場面の魚の群れ、たき火を囲んで村人たちにおはなしを聞かせているマンザンダバの場面は、どれも豊かな大自然の中で生きている人たちの魅力が伝わってきました。

『ノロウェイの黒牛』は、美しい三姉妹の末娘が、身の毛もよだつ怪物とされるノロウェイの黒牛と結婚することにし、黒牛と旅に出る物語です。さとうゆうすけさんの絵は黒牛の毛並みや、切り立つ崖などが緻密に描かれており、幻想的でした。お話には、主人公が食べる場面や、貴族の館やお城に立ち寄る場面もあるにもかかわらず、絵は旅をし、むすめと黒牛が前に突き進んでいる場面ばかりが選ばれています。それによって、旅の苦難と二人が共に歩む姿が読者に印象づけられていると思いました。

「世界のむかしばなし絵本シリーズ」は「世界各地に伝わる、まだあまり知られていない、面白く、力強い昔話を集めたユニークな絵本シリーズ」とのこと。『巨人の花よめ スウェーデン・サーメのむかしばなし』（菱木晃子/文 平澤朋子/絵 2018年1月）から現在まで、15冊が出版されています。再話者も画家もそれぞれのおはなしにぴったりで、このシリーズが続いてほしいと思いました。（K）

ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店

https://honto.jp/store/detail_1570127_14HB320.html

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第20回

第5章 古田足日先生

その2 「散文性のかく得」（下の後半）

昨年（2024年）は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』（童心社1974年）の刊行50周年でした。私が古田足日先生（1927～2014年）に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家

や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■ ----- ■

【3】全国イベント紹介

■ ----- ■

● JBBY 国際アンデルセン賞と世界の子どもの本講座 2025「本は不思議への扉」

講師：富安陽子（作家）

日時：7月5日（土）14：00～16：00 ※有料、定員 200 人

場所：日比谷図書文化館 日比谷コンベンションホール

主催：（一財）日本国際児童図書評議会（JBBY）

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■

【4】プレゼント

■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『デュポン書店の奇妙な事件』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は7月10日（木）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — |

久々のライブでの落語観賞に、連れ合いは、「やっぱり面白い！」との感想。まったく同感。一瞬の笑いは、それはそれで笑えるが、じっくりと話に引き込まれ、オチでの大爆笑はまた格別。物語を楽しむという意味では、落語も児童文学もつながるところがあるのかなと思いました。（TA）

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメルマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
